

2301 離島覚書（沖縄県・石垣島）



ウキペディアより引用

令和5年1月12日

新石垣空港

羽田発 11 時 25 分発のANA91 便は 15 時ごろ新石垣空港に着いた。新空港は 2013（平成 25）年 3 月に開港しているので、すでに 10 年近く経つ。

石垣島には 1975（昭和 50）年 5 月に新婚旅行で訪れて以来、仕事の関係で少なくとも 10 回以上は訪れている。また島旅を始めてからも 2 回、石垣島を経由して各島を巡っているので最も多く訪れた島になるだろう。しかし島全体を包括的に周ったことはなく、また島に関する原稿を起こしていなかったなので、改めて今回の取材旅行となったものだ。

黒島、波照間島、与那国島を周った時は旧空港を利用し、鳩間島、小浜島、新城島（下島）、由布島を周った時は新空港を利用しているので、新空港に降り立つのは 2 回目になる。

旧石垣空港は石垣島の中心市街地に隣接していたから大変便利であった。しかし滑走路長が大型のジェット機には対応していなかったのでオーバーランする事故などもあり、2000mの滑走路を有する飛行場が求められていた。旧飛行場の滑走路を延長する案もあったが、市街地に近いので騒音問題などもあり、郊外に新たに新空港を建設することになったのだ。

当初は白保沖を埋め立てる計画が進められたが、サンゴ礁保護の観点から当初計画は撤回された。その後、カラ岳麓のゴルフ場だった用地に変更され、現空港が整備されたものである。しかし新空港は中心市街地から 15 kmほど離れており、バスで 30 分以上を要することになったので、不便になった。そして市街地までのタクシー料金もだいぶ高くなった。

現在、国内路線は、羽田、成田、中部、関西、那覇の主要空港と離島の宮古島と与那国島を結んでいる。また国際線は台湾と香港に航路が開けている。新空港の開港は輸送量を増大させることになり、島の観光へ大きなインパクトを与えることになった。新空港開業前の利用客数は年間約 70 万人強であったが、コロナ禍前には 127 万人と飛躍的に増加している。なお石垣島には海路で来るルートもあるが、入域旅客数に占める割合は 2 割強であり、空路が圧倒的に多い。

石垣島の面積は 222.24 km² で、沖縄県の離島の中では西表島に次いで 2 番目に大きい。全国の離島の中では、第 10 位の大きさだ（ただし北方領土の国後島、択捉島を除く）。島の主要部は五角形をしており、北東方向に野底半島さらに平久保半島が細長く伸びている。また東側に屋良部半島が突き出ている。このため海岸線の長さは 182.5 km に及ぶ。島の面積が石垣島よりも大きい西表島の海岸線の長さは 174.5 km なのでこれを上回る。つまり長い半島部の存在が海岸線を長くしているわけだ。

島の主要部の北側半分は山地が占め、最高峰は於茂登岳^{おもと}の 526m である。この山は沖縄県で最も高い。一方島の南半分はサンゴ礁が隆起した平地で、サトウキビ畑や牧草が広がる。島の南端に重要港湾の石垣港が開かれており、港の背後には中心市街地が形成されている。

八重山諸島には合計 11 の有人離島があるが、石垣島は単独で石垣市、与那国島は与那国町として 1 島 1 市（町）を構成している。残りの 9 つの島々は竹富町に属している。なお尖閣列島は石垣市に所属する。

八重山諸島は 1908（明治 41）年に琉球王朝時代から続く間切が廃止されると、八重山諸島全体が八重山村になった。その後、1914（大正 3）年に、石垣島の西部が石垣村、東部が大浜村として分村する。さらに 1926（大正 15）年に石垣村が石垣町になり、戦後、米軍の施政権下の 1947（昭和 22）年に石垣町は石垣市に、大浜村は大浜町になった。1964（昭和 39）年に米国統治下の琉球政府のもとで石垣市が大浜町を編入して今日の石垣市が誕生した。

2020（令和 2）年の国勢調査時の人口は 47,637 人、世帯数は 22,033 戸であった。石垣島の戦前の人口は 2 万人ほどで推移していたが、戦後、ほぼ一貫して増加しており、2020 年には過去最高の人口となった。ほとんどの離島で人口減少が著しい中、石垣島は逆に増加しているわけであり、極めて例外的といえよう。なお、人口は石垣港背後の市街地に集中している。

国道 390 号

空港ターミナルのトヨタレンタカーの乗り場から営業所まで送ってもらい、車を借りて 15 時 17 分に出発し、石垣島の最北端の平久保岬をめざす。空港を出るとすぐに国道 390 号に入る。国道 390 号は沖縄本島的那覇市から海を隔てて宮古島を経由し、石垣島までつながっている。石垣島の国道の起点は石垣港近くの 730 交叉点（美崎町）で、ここから島の東側を北上し伊原間^{いばるま}の県道 206 号と県道 79 号が交わる場所が終点となる。この道路はもともと県道であったが 1975（昭和 50）年 4 月に国道に昇格した。ちなみに新婚旅行で訪れた時はいまだ米国基準の右側通行だったから用心しながら運転した。1978（昭和 53）年 7 月 30 日をもって沖縄県の道路は一斉に本土と同様の左側通行に切り替わった。730 交叉点の名称は

このことに由来する。国道の実延長は 29.6 km である。

国道の両側にはヤラブ（標準和名：テリハボク）の街路樹が続く。かなり大きく生長しているところみると、復帰間もないころに植えられたのだろう。下枝はきれいに刈られ、鬱蒼とした並木の中を走ることになる。このヤラブは石垣地方ではフクギとともに防風林・防潮林として植えられている。また、木質が硬いことから建築材やサバニなどにも活用されてきた。ヤラブはフクギに似ているので、フクギと勘違いしていたが、後述する千川君にヤラブという木であることを教わったものだ。

国道 390 号沿いには小さな集落が点在し、道路の両側にサトウキビの畑や牧草地が広がる。畑にはオクラや島ラッキョウ、ニラなどの野菜類が栽培されていた。またドラゴンフルーツやマンゴーの露地栽培も行われている。オクラは南瓜と並ぶ島外出荷の代表的野菜であり、マンゴーとパイナップルも石垣島を代表する果樹である。



国道 390 号線沿いのヤラブの並木（左）、オクラの畑（右）

星野

最初の集落が星野である。国道脇に「星野共同売店」があり、その脇に入植記念碑と入植者の氏名が刻まれた入植者之碑が建っていた。石垣島の北部一帯はマラリアが発生していたため不毛の地であった。戦後の食糧難からこの北部一帯に沖縄本島を中心に入植者が相次ぎ、集落を形成していったのである。

星野の集落は 1950（昭和 25）年 3 月に沖縄本島のおおぎみ村から入植した 24 戸、105 人によって拓かれた。大宜味村以外からも石垣島島内から 5 戸が入植している。入植当初は芋、陸稲、落花生がつくられていたようだ。共同売店は、入植後間もない 1953（昭和 28）年には早くも開店している。

この共同売店は沖縄地方の各所に見られる特徴的な店舗で、集落の住民が共同で出資・運営する。いわば集落住民による生協のようなものだ。全漁連にいた市村さんが沖縄県の共同店第 1 号である奥共同店のことを書いているが、ここは 1906（明治 39）年の開業で、100 年以上の歴史を有している。近年はコンビニの普及で押され気味であるが、後述するように石垣島の北部一帯にはいくつもの共同店が残っている。

星野の次の集落が伊野田、続いて大野である。この 3 集落は大宇桃里に区分され、島北部の東海岸に位置する。伊野田も開拓集落でこちらは星野よりも遅れて 1951（昭和 26）年 10 月にやはり本島の大宜味村から 30 戸、138 人が入植している。入植当初は芋、バナナ、ハ

ツカ、陸稲、落花生、パインを作っていたようだ。

伊野田の集落にも国道脇に共同売店が置かれていた。現在は 86 戸、144 人が住み、入植当時よりも人口、世帯数は増えている。大野はわずか8戸の集落である。



星野共同売店（左）、星野集落の入植記念碑（右）

玉取崎展望台

大野の集落を過ぎ、少し坂を登った右手に玉取崎という岬がある。

玉取崎から北東部に向け平久保半島が細長く突き出ているが、野底半島と平久保半島を結ぶ結節点に近い。半島の東側が東シナ海、西側が太平洋である。

この平久保半島は 15 kmほどと長く、主として半島の西側に、船越、伊原間、明石、久宇良、吉野、平久保、平野の7つの集落が続く。これらの集落を結ぶ路線バスも運行されている。

国道をそれて脇道を登っていくと、比較的広い駐車場とトイレが整備されている。駐車場に車を停めてハイビスカスが植樹されている歩道を歩いていくと、先端に琉球瓦を葺いた展望台があった。周囲に高い木がないので、風景を遮るものはない。展望台には5～6人の観光客がいた。

玉取崎展望台からは平久保半島と野底半島が一望できる。また眼下には美しいサンゴ礁が広がる。こうした立地条件から石垣島の有名な観光スポットになっている。

玉取崎展望台から坂を下ると国道 390 号の終点となる。ここが野底半島を回る県道 79 号と平久保崎に向かう県道 206 号の分かれ道である。



玉取崎の展望台（左）、展望台から平久保半島の安良岳を望む（右）

伊原間

石垣島はもともと南部の平地に人口が集中していた。北部はマラリアがまん延する地域であったため集落そのものが少なく、上述したように戦後になって沖縄本島をはじめとする移住者によって開拓されたのであった。

平久保半島の入口は石垣島で最もくびれた地峡部にあたり、その幅は僅か 200mほどだ。地峡部の西側が伊原間湾、東側が東シナ海で、両海域ともサンゴ礁が発達している。地峡部の集落が船越である。ここには石垣島にある4つある漁港の一つ、船越漁港（第1種）が整備されている。船越という名は太平洋から地峡部をまたいで東側の東シナ海に船を運んだことに由来するそうだ。船越は、沖縄本島の勝連から10戸63人が計画移民として移住してできた集落だが、入植後まもなく8戸が退団し、残った2戸9人は伊原間集落に移転している。

伊原間はもともと明石集落の西側にあったが、明治期に現在地に移ってきたという。こちらだけは平久保半島の古くからの集落になる。集落には伊原間中学校が置かれている。この中学校の近くに以前入ったことのある新垣食堂がある。高校時代の同級生の干川明君に連れて行ってもらった食堂で、この牛そばはことのほか美味しかった。今回も食べようと寄ったのだが、あいにく売り切れており、店は閉まっていた。ちなみに干川君は食堂の「おばあ」とはかなり親しい間柄のようだった。

伊原間の北側の集落が明石である。県道206号を右折した先に明石公民館があり、公民館内に明石共同売店が置かれている。店のガラスには「天然モズク全国発送いたします」の貼り紙、さらに「ハブ油クリーム」、波照間島の泡盛「泡波」（高額のパremiumのつく泡盛）、「伊佐の手焼せんべい」などの商品案内も貼られている。店に入って、地元の人がつくったサーターアンダギーを購入する。

この明石も戦後開拓された集落で、公民館の脇に入植20周年を記念した「開拓の像」、「開拓之碑」そして「開拓の詩」の石碑が建つ。開拓団の人は歌まで作り団結を深めたようだ。1955（昭和30）年4月に63戸349人が入植している。出身地は沖縄本島の大宜味村、読谷村、玉城村、具志川村、屋部村、久志村、石川市、美里村、北中城村と石垣島の石垣市、大浜町などであった。なお上述の共同売店は入植した年に早くも開店している。入植当初は芋、陸稲、落花生、サトウキビ、玉葱、ジャガイモ、パイン、葉タバコなどが作られた。ちなみに2019年末時点で82戸151人が住む。なお明石集落には小学校が置かれている。



伊原間集落にある新垣食堂（左）、明石集落の開拓の像と開拓之碑（右）

サビチ鍾乳洞

石垣島には公開されている鍾乳洞が2つある。バナナ岳南の石垣島鍾乳洞と伊原間のサビチ鍾乳洞である。前者が鍾乳洞の規模が大きく、しかも市街地に近いことから入場者数も多い。石垣島ツアーの代表的な観光コースになっているようだ。一方サビチ鍾乳洞は市街地からかなり離れているので入場者数はかなり少ないものと推定される。

県道206号から右折し、少し入ったところにサビチ鍾乳洞があった。伊原間観光株式会社という民間会社が管理している。入場料1,200円を支払って中に入る。観光客は2組ほどだった。

石垣島の平地はサンゴ礁が隆起した土地だ。長い年月の間に石灰岩が溶けて空洞を作った。鍾乳洞の掲示板には2億7千万年前に海底が隆起したと書いてあったが、確かなことはわからない。主洞の長さは237m、支洞は85mで、全長322mに及ぶ。洞穴の幅は平均15m、天井の高さは最も高いところで12mである。洞を抜けた先は東シナ海になる。

鍾乳洞内の道はコンクリート舗装されているので、歩きやすいが、天井から落ちてきた水滴で濡れているので滑りやすく、用心しながら歩くことになった。道に沿って小さな川が流れていた。入口付近には泡盛の甕や洋酒の瓶がたくさん置かれていた。鍾乳洞の内部は一年を通じて気温が低くかつ変化が少ないので、古酒を熟成するにはもってこいの条件がそろっているためだろう。

15分ほど歩くと海に出た。このサビチ鍾乳洞の出口は海岸線に面しており、全国的に見ても珍しい鍾乳洞である。海には浸食を受けた奇石が立ち、ここはパワースポットになっているようだ。さらに沖合には津波石が点在するのが見られた。



サビチ鍾乳洞の内部（左）、鍾乳洞を抜けた先の海岸（右）

平久保

平久保は久宇良、吉野、平久保、平野の小字で構成される。何れも開拓団によって戦後つくられた集落である。平久保に小学校が置かれている。

久宇良は明石集落よりも1年遅れの1956（昭和31）年3月に53戸、254人が入植している。出身地は沖縄本島の^{ちやたん}大宜味村、^{たまぐすく}北谷町、^{よみたん}知念村、^{よみたん}玉城村、名護市、^{よみたん}読谷村、勝連町、沖縄市、宜野湾市、浦添市、那覇市、大里村と広範囲に及び、石垣市からも2戸入植している。入植当初は芋、陸稲、玉葱、馬鈴薯、落花生がつくられていたようだ。

続く吉野は同年に沖縄本島の出身者23戸108人が入植している。最初は西表島の古見に入植したが、2年後にこちらに再入植したのであった。多分、西表島は何らかの原因で開拓

が難しかったのかもしれない。しかし、吉野には現在3戸3人が住むだけで、廃村に近い状態になっている。

平久保も1956（昭和31）年に主として宮古島から移住した計画移民の集落である。30戸151人が入植し、当初はサトウキビ、落花生、パインなどがつくられていた。

続く平野は石垣島の北端の集落で、東運輸株が運航するバス（平野線）の終点でもある。こちらは1957（昭和32）年5月に、60戸80人が沖縄本島、伊江島、久米島、南大東島、宮古島からの開拓民によってつくられた集落である。当初は芋、パイン、サトウキビ、落花生をつくっていた。現在は大部分が牧草地となっており、肉牛の繁殖が盛んである。

石垣島の北端が平久保崎で、ここに平久保灯台が置かれている。灯台の手前に小さな駐車場があり、車を停めてここから歩いて坂を登った先を少し下がったところに灯台が立つ。周辺の牧草地には牛が放たれ、海にはサンゴ礁が広がる。灯台の前方には大地離（無人島）という小島が浮ぶ。



石垣島北端に至る県道206号線（左）、最北端の平久保崎灯台（右）

太朗窯

平野の集落に至る手前に「やむちん屋・太朗窯」がある。「やむちん」とは沖縄の方言で「焼き物」を意味する。周囲に建物はなく、道路脇にポツンと売店兼作業場兼自宅が建つ。以前、干川君に案内されて訪れたことのある店だ。その時にマグカップを購入した。干川君とご主人の堀井太朗さんはお互いにIターン者なので親しい関係のようだった。堀井さんに干川君の消息を尋ねたが、最近は会っていないという。

店には知人らしき数人の若者がいて、兵庫県のイカナゴのくぎ煮の話をしていて、どうも最近では不漁で食べられないと嘆いている。じつは堀井さんは兵庫県網干^{あぼし}の出身だった。海員学校で学んだのち船員になり、その後ありとあらゆる職を経験し、バックパッカーとして世界をヒッチハイクしたそうだ。さらに写真専門学校で学び、撮影の技術を身に着ける。特にインドには興味をひかれたようで通算4回インドを訪れている。この旅で撮影した記録を「ディア・インディア」という写真集にまとめて出版している。

その後、やむちんの本場、本島の読谷^{よみたん}で陶芸を学び、1997（平成9）年に石垣島に移住して窯を開いた。最初は明石集落に住んでいたが、2012（平成24）年に現在地に移って、陶芸家になった。様々な職業を経験しているから何でもできるようになり、この建物も彼一人で建てたものだという。

作品は読谷で学んだ影響が色濃く出ており、琉球の民芸調である。以前購入したマグカップは愛用しているが、この度は女房もマグカップと茶碗をそれぞれ1個購入した。



「太朗窯」の売店兼作業場（左）、太朗窯の作品（右）

牧場と畜産

平久保半島から来た道に戻る。伊原間の交叉点を右折して野底半島を周回する県道 79 号線に入り、伊原間湾沿いを進む。

平久保半島から野底半島にかけての一带は牧草地帯である。サトウキビはあまりない。広々とした草地には黒毛和牛が放たれている。いわゆる草地畜産が盛んな土地だ。一部の牧草は刈り取られ、ロールベールサイレージ（乾燥した牧草を特殊なフィルムで巻いて密封したもの。保管中に干草が醗酵する）がいくつも転がっていた。

亜熱帯域の石垣島は周年を通じて牧草が生長するため、牧草生産の反収は全国平均の3倍以上であり、年間5回転する。冬のこの時期でも牧草は青々としている。

離島は和牛の繁殖が盛んであるが、肥育を併せて行っているところは福江島などにごく限られている。この石垣島では肥育も盛んで、繁殖と肥育の両方に取り組んでいる。おそらく離島の肥育産地としては日本一の規模だろう。直近の和牛の産出額は 56.1 億円であり、農業産出額（87.6 億円）の 64%を占めている。すなわち和牛生産は観光業に次ぐ石垣島の重要な産業になっているわけだ。

沖縄県の「離島関係資料」によると、2020（令和2）年末時点における牧草地の面積は 2,526.6ha であった。島の総面積は 22,224ha なので、島の1割以上を占めている。ちなみに島の北側の山地は島の面積の約半分を占めから、利用可能な平地だけで見れば、約2割強に相当する。

市役所の畜産課によると、2021（令和3）年の石垣島の黒毛和牛の畜産農家は 497 戸で、飼養頭数は 23,400 頭である。島の人口の約半分に相当する牛が飼われているという勘定になる。一戸あたりの平均飼養頭数は 47 頭で、他の島と比べると経営規模ははるかに大きい。

一方、肥育農家は 45 戸で、現在の肥育頭数は 2,415 頭である。

石垣島には、JAおきなわの八重山家畜市場が市街地に近い真栄里に置かれている。ここでは毎月1回、子牛のセリが行われており、月に平均700頭ほどが取引されている。一方、肥育牛は大浜にある㈱八重山食肉センターで屠畜され、枝肉に加工されて流通する。この会社は石垣市、竹富町、農協、生産者、食肉販売業者の出資により設立されたもので、1974（昭

和 49) 年 6 月に業務を開始している。コロナ禍前は年間 1,700 頭前後の処理頭数で推移していたが、コロナ禍で需要が落ち、再び回復しているものの、昨年の屠畜数は 1,562 頭であった。

このように石垣島で和牛生産が盛んになるのは沖縄県の本土復帰 (1972 年) が実現して以降のことである。48 年前に初めて石垣島を訪れた時も北部方面へドライブしたが、パイナップル畑とサトウキビ畑の印象が強く、牧場の記憶は薄い。復帰後、沖縄特別措置法が施行され、1976 (昭和 51) 年から国庫補助事業による畜産基地事業が始まった。草地開発整備事業、畜産建設事業などの各種事業が導入され、17 年余の歳月をかけて粗飼料の生産基盤と施設や機械類が高補助率で整備された。こうした行政のサポートが石垣島の草地畜産の発展へとつながった。

石垣島で肥育された和牛は「石垣牛」としてブランド化されている。ブランドの主体は J A おきなわの「石垣牛肥育部会」である。キャッチフレーズは「八重山生まれ八重山育ち」だ。ブランドの定義は、①八重山郡内で生産、統一された独自配合飼料により肥育管理された黒毛和種の去勢・雌牛、②去勢牛は 24～35 ヶ月、雌牛は 24～40 ヶ月、③日本食肉格付協会の特選肉質等級 (5 等級・4 等級)、名産肉質等級 (3 等級・2 等級)、の条件を満たすものである。このブランドは 2002 (平成 14) 年に商標登録されている。市街地の居酒屋は「石垣牛」のオンパレードで、観光客の増加が「石垣牛」の島内消費に拍車をかけた。



黒毛和牛の放牧場 (左)、採草場と生産されたロールベールサイレージ (右)

北部西岸の集落と尖閣神社

県道 79 号を伊原間湾から太平洋岸に出て南下する。野底半島の中心部に野底岳 (282m) がそびえる。山頂は鋭く突き出ており、特徴的な形の山で、「しま山 100 選」に選ばれている。登山口まで車で行くことができ、20 分ほど歩けば山頂に達する。石垣島は関東よりも日没時間が 1 時間半ほど遅い。ただ 18 時 30 分になっていたから、日没が近づいており、登るのは断念せざるを得なかった。

太平洋岸沿いに栄 (美野と越来が合併)、兼城、下地、多良間、伊土名の各集落が続く。これらの集落 (小字) は野底 (大字) 地区に包括されている。野底地区の現在の人口は 324 人、世帯数は 160 戸である。これら 5 つの集落は何れも 1954 (昭和 29) 年に政府の計画移民として入植した人たちによって形成された。美野は主として沖縄本島の美里、越来は沖縄本島、兼城は主として本島の兼城、下地は宮古島の下地、多良間は主として宮古島の多良間、

伊土名は宮古島、本島、久米島からやって来た。集落の周辺には開拓された農地が張り付いている。栄地区にはイタリアンなどの飲食店が多い。

伊土名の集落を過ぎてしばらく走り、県道を左折したところに尖閣神社が置かれている。砂利道を大きく曲がった先に石の鳥居があり、その先に石造りの小さな社殿が建つ。この本殿の先約 160 kmのところには魚釣島が位置するという。魚釣島は改めて述べるまでもなく日本の領土である。明治時代に古賀辰四郎がアホウドリの羽毛採取事業を行ったのが最初で、アホウドリの資源が枯渇するとカツオ漁業と鰹節製造に乗り出す。1908（明治 41）年ごろには鰹節製造は軌道に乗り、この当時 99 戸、248 人が魚釣島に住んでいた。

境内に尖閣神社再築之碑が置かれていたので、この碑文をもとに尖閣神社再建の経過を示しておこう。魚釣島に人が住んでいた当時、島には御社があり、島民の心のよりどころであったという。2000（平成 12）年に日本青年社が主導し、魚釣島に社殿を創建、神社神道による大祭を毎年斎行してきたが、2008（平成 20）年に中国人が密航しこの神社を壊した。しかし海上保安庁は魚釣島への上陸を認めないため、やむなく 2018（平成 30）年 11 月に石垣島のこの地に再建したという。



頂上が鋭く尖る野底岳（左）、尖閣神社の鳥居と社殿（右）

日没が近づいてきた。尖閣神社を後にして島のほぼ中央部を縦断する県道 87 号を通過して、石垣港近くのホテルへ急いだ。

令和 5 年 1 月 13 日

魚市場

この時期、石垣島の日の出は 7 時 30 分ごろである。関東よりも 1 時間半ほど遅い。八重山漁協の魚市場は漁協の事務所の 1 階にある。毎日 8 時から荷を受け、9 時からセリが始まる。8 時半ごろ市場に顔をだすと、すでに荷捌き場に魚が並んでいた。

市場の仲買人は 30 人の枠があるが、実際に登録している人は 25 人ほどのようだ。このうちほぼ毎日、市場にやって来る売買参加者は 10 数人だという。魚の小売店、居酒屋に納める業者、スーパーなどの関係者である。ここでは石垣島島内で消費される水産物が取り扱われ、2021（令和 3）年度の取扱量は約 80 トン、販売額は約 5,300 万円だった。

漁協の市場に出荷する漁業者は限られており、多くの漁業者は航空機で那覇地区や糸満の市場に出荷する。この場合は 15 時までに漁協に荷を持ち込み、運送業者の保冷車に積んで空港に運び、その日のうちに沖縄本島に到着、翌日の市場に出荷される。

市場の隅では水揚げされたソデイカを2人の漁協職員が皮を剥ぐ作業をしていた。

ちょうどマグロ延縄と底魚一本釣りを兼業する漁船が入港してきた。乗組員の若い2人はインドネシア人で、屈託のない笑顔をつかべ、ピースサインを出した。



セリ前に陳列された魚介類（左）、マグロ漁船の乗組員のインドネシア人青年（右）

尖閣遭難碑

漁協の市場から海岸沿いの道を北上する。新川地区の舟蔵という集落の道端に「尖閣列島戦時遭難死没者慰霊之碑」の案内板が出ていたので見に行った。細い道を進むと海岸に出た。正面に平坦な竹富島が横たわり、左手奥に石垣港を望める。

護岸沿いの道を進み、細い川を渡った草むらの先に慰霊碑が置かれていた。石碑には亡くなった合計80人の氏名が刻まれている。その半数以上は女性であった。疎開船は180人を乗せていたから、生存者は100人だったことになる。

石碑の解説をもとに事件のあらましを紹介しておこう。

すでに沖縄戦が最終局面を迎えていた1945年6月30日、島民180人を乗せた台湾への最後の疎開船である「第1千早丸」と「第5千早丸」の2隻は午後9時過ぎに石垣港を出港し、西表島の船浮を経由して台湾に向けて航行した。米軍が制空権を握っていたことから、疎開船は尖閣諸島付近まで迂回する欺騙針路を選んだ。

しかし7月3日午後2時ごろ、尖閣列島近海を航行中に米軍機に発見されて機銃掃射を浴びる。第5千早丸は炎上沈没し、第1千早丸は航行不能になった。第1千早丸は乗組員の必死の努力で尖閣列島の魚釣島に漂着した。すでに尖閣諸島には、本船団とは別に遭難して漂着した日本兵6人がおり、合流している。

1ヶ月近くの集団生活の後、食料もなくなったことから小舟をつくって決死隊を編成し、救助を要請することになった。10日ほどで全長5mのサバニが完成した。8月12日午後5時に石垣島に向けて出発、14日午後7時に川平湾の底地島に到着した。奇しくも終戦の前日であった。その後救助隊が魚釣島に急行し、戦後の8月19日に無事帰ることができた。

以上が遭難の経緯であるが、魚釣島は無人島でかつ遠いこと、当初は米軍の占領統治下に置かれていたことから現地で慰霊を行うことが困難であった。その後、1969年（昭和44）年に石垣市長一行が島に上陸して、「台湾疎開石垣町民遭難慰霊之碑」を建立した。遭難者遺族代表らも同行し、再び不幸な漂着者があった時には食糧となるよう、長命草とパパイヤの種子を島に植えている。

その後、1978年（昭和54）年には遺族会が結成されたが、尖閣列島への上陸が事実上不可能になったため、2002年（平成14）年にこの地にも慰霊碑を建立したのである。この慰霊碑の前では毎年7月3日に遺族会による慰霊祭が行われている。

学童疎開船の対馬丸が那覇から長崎に向かう途中、米潜水艦の魚雷攻撃を受けて、1,484人の犠牲者を出した痛ましい事件はよく知られているが、「台湾疎開石垣町民遭難事件」、あるいは遭難船名に由来して「一心丸・友福丸事件」とも呼ばれているこの事件は、今回初めて知った。



海岸から石垣港と市街地を望む（左）、尖閣列島戦時遭難死没者慰霊之碑（右）

富崎観音堂と唐人墓

海岸沿いの道を進むと富崎^{ふさき}という地に富崎観音堂が置かれていた。この観音堂の成り立ちが入口に書かれていた。その概要を紹介しておこう。

八重山の役人だった西表直香は首里王府からの帰りに乗船していた船が中国の福州まで流されてしまった。この地で石垣島に漂着し直香が救助した中国人と偶然再会。この中国人から無事に石垣島に戻れるようにと2体の観音像を賜る。一方、島では直香の妻が夫の生還を願い、八重山最初の社寺である「権現堂」や「美崎御嶽」で毎夜祈っていたところ、その姿に感銘した桃林寺の住職から1体の観音像を贈られる。この甲斐あって無事に石垣島に戻った直香は合わせて3体の観音像をこの地にお堂を立てて安置したのが、観音堂の成り立ちというわけだ。時に1742（寛保元）年のことである。

このような由緒から富崎観音堂は海上交通安全と無病息災の祈願所として石垣島の人々の信仰を集めてきた。

石畳の参道脇に石灯籠が並ぶ。周囲は鬱蒼とした樹木で覆われている。正面には赤瓦の観音堂が建つ。まだ新型コロナがおさまっていなかったから、賽銭箱前の鈴は取り外され、マスク着用とアルコール液での手指消毒をお願いする大きな紙が貼ってあった。境内にはネットが張られ、おみくじを結んだ白い紙が美しい景色を形成していた。

沖縄には伝統的な先祖崇拜の御嶽がある。この観音堂は全く別の信仰対象であり、寺なのか神社なのかわからない。廃仏毀釈の影響を受けず、明治維新以前の神仏習合の姿をそのまま留めているのではないかと想像してみた。

観音堂から海岸道路を少し進んだ先の一段高い場所に唐人墓がある。この一角は公園になっていて、周辺には「平和祈願之碑」「米軍飛行士慰霊碑」、八重山青年会議所と中国の蘇

澳港国際青年商会との姉妹締結十周年の碑などが置かれている。

唐人墓は福建省出身の 128 人の霊が祭られている墓地である。碑文を参考に唐人墓ができた歴史的経過を整理しておこう。

奴隷制度が廃止されると、ヨーロッパの植民地やアメリカで労働力不足が深刻になる。労働力不足を補うためアジア人の労働力が集められた。この人たちは苦力と呼ばれ、季節労働者としてアメリカを始めとする各地に送られた。1852 年 2 月、廈門で集められた 400 余人の苦力は米国の商船ロバート・バウン号に乗せられ、カルフォルニアに向けて出発した。しかし航海中に辮髪を切られ、病人を海中に投棄するなどの仕打ちに、苦力たちは反乱を起こし、船長ら 7 人を撲殺した。ところが台湾に向かっていた船は石垣島の崎枝沖で座礁してしまう。八重山の蔵元（役所）は富崎原に仮小屋を建てて、彼らを收容した。しかし英米の怒りは収まらない。3 回にわたって石垣島に軍艦を派遣して砲撃を加え、さらに武装兵を上陸させて厳しく捜索を行った。中国人らは山中に逃亡したが銃撃、逮捕され、あるいは自殺者がでるなどの惨憺たる状況となった。

琉球王府と蔵元は人道的に対応、中国人側の被害を少なくするよう極力配慮し、島民も深く同情、密かに食料などを運んだが、疫病による病死者が続出した。死者は一人ひとり石積み墓を建立して丁重に葬られた。この間、関係国間の事件処理に対する交渉の結果、翌年 9 月に琉球の御操船 2 隻で生存者 172 人を福州に送還して事件は終結した。

この富崎原一帯にはこの事件で死亡した唐人を葬った煉瓦状の墓碑を配した墓が戦後まで多数点在していた。1970（昭和 45）年、石垣市は異国の地に果てたこれら不幸な人々の霊魂を合祀慰霊するため唐人墓建立委員会を結成、中華民国政府の支援も受けて、墓を整備、翌 1971 年に完成した。これが現在の唐人墓である。なお唐人墓の隣には新しい建物が建設中であったが、これが何なのかはわからない。



富崎観音堂（左）、唐人墓（右）

リゾートホテル

石垣港周辺にはもちろん数多くの宿泊施設があるが、港から観音崎にかけての南海岸やその先の西海岸にもリゾートホテルが並んでいる。

石垣島の主要な産業は観光業である。新空港ができて輸送量が増えると、観光入込客数は飛躍する。コロナ禍以前の 2019（令和元）年には 160 万人となり、観光客が島に落とす観光収入は推定約 1,000 億円に達した。

2019年時点の石垣島の観光施設数は全て合わせて334軒、収容人員は13,258人である。このうちリゾートホテルの収容人員数が最も多く、23軒で客室数は2,047室、収容人員は5,236人であった。つまり単純に考えると、島に来た観光客の約4割がリゾートホテルを利用していることになる。特にツアー客の大部分はリゾートホテルに泊まっているのだろう。

唐人墓の先が観音崎で、ここに四角い形の白い灯台が立つ。1953（昭和28）年に米軍によって建設されたもので、本土復帰後、海上保安庁に移管され、数度の改良を経て現在に至る。灯台の下は観音崎公園になっている。

名蔵アンパル

観音崎を過ぎて島の西岸沿いの道路を北上すると、やがて「名蔵アンパル」が現れた。島の最高峰である於茂登岳を源とする名蔵川の河口に発達した河口干潟である。アンパルとは「網張」と書く現地語である。名前の由来は諸説あるが、私には干潟で網を張って魚介類を獲った場所と解釈するのがしっくりする。

河口域にはトンボロが伸びて、大部分が閉鎖されており、名蔵大橋で海とつながる。東西1.5km、南北2kmほどの湿地で、総面積は1,145haほどである。干潮時には広大な干潟が出現する。周囲にはマングローブ林、砂浜が広がり、背後に海岸林が続く。この干潟はシギ、チドリ、サギ類などの渡り鳥の中継地あるいは越冬地となっており、2005（平成17）年11月にラムサール条約の湿地として登録されている。また、国の鳥獣保護区に指定されている。

トンボロ上には道路が整備されていて、道路脇にはアカギの並木道が連なっていた。アカギは石垣島に自生する木だが、小笠原では外来種として目の敵にされており、環境省は必死の駆除活動を展開している。

この名蔵アンパルの上流には後述するように製糖工場がある。この工場からは操業期間中に温排水が干潟域に流れ込んでおり、干川君は製糖工場の温排水が環境に与える影響について心配されていた。

アンパルの北の端に「石垣やいま村」という観光施設が整備されている。時間の関係で中には入らなかった。



名蔵アンパルの河口と干潟（左）、トンボロ上の道路脇に植栽されたアカギ（右）

石垣島製糖(株)

名蔵アンパルの東側に石垣島製糖(株)の製糖工場が置かれている。この工場は島内にあつ

た24の工場を買収して1961（昭和36）年9月に設立された。当初は黒糖（含蜜糖）の生産からスタートしたが、その後すぐに分蜜糖の生産に切り替わる。2003（平成15）年に設備を増設・更新し、日産1,000トンとなり、今日に至る。生産能力は宮古島の2つの製糖工場に次いで大きい。三井製糖系列に属する。

工場の壁面には、「夏植目標470ha」「農家と共に歩む」の標語が掲げられていた。

沖縄県の「離島関係資料」によると、2020（令和2）年2月時点の石垣島のサトウキビ作付経営体数は319であった。また「統計いしがき」によると、2020年度のサトウキビの収穫面積は1,336haで、収穫量は85,658トン、生産額は約19.5億円であった。この10年間のサトウキビ生産量や生産金額はあまり変わっていない。収穫面積は上述した牧草地の半分ほどである。

サトウキビは石垣島のほぼ全域で作られているが、比較的多いのが白保、大浜、宮良、新川、名蔵などの集落であり、石垣島の南部、つまり市街地の周辺部が主な産地になっている。

ちょうど収穫期にあたり、工場が稼働していたので、島内のサトウキビ畑では収穫作業が行われており、工場には次々のサトウキビを積んだトラックが入って行った。

収穫は大部分がハーベスターによる機械刈になっているようで、島内にはハーベスターが30台ほどあるらしい。栽培農家は収穫量に応じて工賃を支払うシステムになっている。



サトウキビ畑と石垣島製糖株の工場（左）、ハーベスターで刈り取られたサトウキビを積んだトラック（右）

バナナ岳

八重山諸島は島の大部分が、①古い岩石から構成される山地・丘陵を有する標高の高い島と、②琉球石灰岩で構成される平たく標高の低い島に大別される。前者は西表島、小浜島、与那国島、尖閣諸島で、後者は竹富島、黒島、新城島、鳩間島、波照間島が該当する。石垣島は①と②が混在する島になる。

石垣島の山地は、①北から平久保半島の北東へ南東方向に細長く並ぶ山系、②野底岳から東南方向に伸びる於茂登岳を主体とする山系、③バナナ岳を中心とする南西方向に連なる山系、の3つの山系が組み合わさってできている。これらの山系を構成する地質は片岩、千枚岩、チャートなどで、およそ2億年から3,000万年前の古い地質である。この古い山地を取り囲むように石灰岩を主体とする数10万年前以降の新しい地層（隆起サンゴ礁）が分布し、海成段丘を形成している。

バナナ岳に登ると、この石垣島の地形がよくわかる。製糖工場を観てから、以前、干川君に案内してもらったバナナ岳に登る。急勾配の曲がりくねった道を進むと、雨がぱらついてきた。バナナ岳（標高 230m）の近くに、「エメラルドの海をみる展望台」というやけに長ったらしい名前が付けられた場所がある。この展望台に登ると、隆起サンゴ礁の平地と西表島との間に続くサンゴ礁の海・石西礁湖を一望できる。晴れていれば、遠く西表島などを見ることができるはずだが、雨にかすみ近くの竹富島しか見えなかった。

隆起サンゴ礁の平地には、市街地とそれを取り囲むように牧草地、サトウキビ畑、水田が広がる。1771（明和 8）年の「明和の大津波」ではこの平地が水没した。博物館に掲げられていた「大波之時各村之形行書」によると、この津波による死者・行方不明者数は 8,437 人に及ぶ。津波前の人口 17,269 人は 8,832 人に減少したから、島民の約半数が犠牲になったことになる。特に真栄里、大浜、宮良、白保、伊原間、安良の各村の犠牲者はきわめて多かった。この地形を見ると納得がいく。



展望台から石垣島の市街地を望む（左）、バナナ岳山麓に広がるバナナ公園（右）

川平湾

名蔵アンパルの北、石垣島の北西部に川平湾がある。

湾の奥行は約 2.5 km、最大幅は 1.2 km、面積は 174.2ha である。9つの隆起サンゴ礁の岩島が分布する。湾内にはグラスボートが運航され、石垣島を代表する観光地になっている。新婚旅行で訪れた時は川平湾を望む浜辺のミニホテルに泊まったが、そのホテルはだいぶ以前に廃業したようだ。

川平湾について知ったのは 1960 年代後半のことであった。当時、川平湾では藍藻のトリコデスミウムの研究が組織的に行われており、その成果が日本海洋学会で発表された。学生時代にその口頭発表を聞いて、この湾の存在を知ったのだった。トリコデスミウムは陸上でいえば根粒バクテリアのように窒素を固定する藻類で、貧栄養な亜熱帯域では基礎生産を支える重要な植物である。当時はまだ陸域からの栄養塩類の流入負荷は少なかったため、貧栄養な海域での基礎生産力が注目されたと思われるが、今では観光客が多く、後背地の農業開発も進んでいるので、富栄養の方が問題になりつつある。

川平湾の正面には小島という無人島があり、この島によって湾口部は幅 150m ほどの水路になっている。このため潮汐に伴って湾内に入出入りする海水は細い水路を通るため流速は早い。

後述する黒真珠の売店の駐車場に車を停めて、川平湾沿いに整備された遊歩道を歩き、川平公園展望台に立った。観光バスによって続々と運ばれてきた観光客は、白い砂浜からグラスボートに乗り込んでいった。

この湾の背後に川平の集落が形成されている。石垣島はこれまで述べてきたように北部や半島部を中心に戦後入植した開拓集落が多いが、川平は古くからの集落である。15世紀のころ、石垣島には3人の頭目がいたという。大浜村のオヤケアカハチ、石垣村の長田大主^{なあたふうず}、そして川平村の仲間満慶山^{なかまみつけま}である。後述するようにオケヤアカハチは群雄割拠する八重山地方を平定した豪族の首領になるが、川平湾の仲間満慶山は彼によって滅ぼされたのである。その生誕の地は川平湾に面している。

川平の集落は湾の西岸の緩やかな傾斜地に形成されている。かつては石垣港から琉球王府に貢納品を運ぶマーラン船の風待ちの港として利用されていた。現在の人口は686人、世帯数は425戸である。

かつての職場の同僚であった佐々木真君は30年ほど前に石垣島にやってきて川平の市営住宅に住み、漁師とダイビング案内や遊漁案内などを営んできた。そして3人の子どもを育てた。私もだいぶ以前に自宅を訪れたことがあるが、今や川平の漁師は彼1人になってしまった。そして川平湾の造礁サンゴはこの30年間で大きく減少しているらしい。

川平の産業は観光業がトップであるが、この他に集落内には「高嶺酒造所」という1949年創業の泡盛の造り酒屋がある。ブランド名を「於茂登」という。石垣島には6つある泡盛酒造メーカーの一つである。また、後述するようにクロチョウガイの真珠養殖場の発祥の地であり、湾内でも養殖されている。加えて農業も行われているが、海面の利用は観光業が主体であり、漁業はきわめて低調である。



川平湾の遊覧船乗り場（左）、川平湾の真珠養殖漁場（右）

琉球真珠

川平湾に琉球真珠(株)の養殖場と真珠製品の直売店がある。ここで八重山地方における真珠養殖の歴史を振り返っておこう。

沖縄の真珠養殖の歴史は、人頭税廃止の先駆けとして沖縄近代史に偉大な足跡を残した中村十作(1867~1943)とともに始まる。中村が宮古・八重山の先島地方にやってきた本来の目的は、天然真珠を産するクロチョウガイを手に入れ、真珠採取事業を興すことにあった。1910年(明治43)年から奄美大島でマベガイを使った半円真珠養殖を試み、1912年(大正

元)年には、宮古島で渡辺理一と共同で、クロチョウガイを使った半円真珠養殖に取り組んだのである。

一方、1914年(大正3)年、御木本幸吉(1858~1954)は石垣島の登野城に事務所を開設し、名蔵湾の観音崎と登野城地区の美崎浜でクロチョウガイを使った真珠養殖に着手する。この事業には、石垣島で海産物商を営み、また尖閣諸島の開拓者として知られる古賀辰四郎が共同出資している。御木本は、かつて古賀から琉球泡盛を仕入れるなど、旧知の仲にあつたようだ。当時、石垣島の古賀商店では、貝殻が貝ボタンの原料として需要があつたヤコウガイやタカセガイとともに、クロチョウガイの買入れも行っていたという。

しかし養殖場は相次ぐ台風による被害のため閉鎖を余儀なくされ、古賀はこのころに共同経営から手を引く。2年後の1916(大正5)年に川平湾に養殖場を移して、現地に生息していたクロチョウガイに絞って研究を始めたのが、川平湾における真珠養殖の始まりだった。御木本はクロチョウガイの真珠づくりに傾注するものの量産化には至らず、1940(昭和15)年には戦時下の統制で事業を断念した。なお真珠養殖の最適地として川平湾を御木本に推薦したのは、石垣島測候所長の岩崎卓爾といわれている。

琉球真珠の実質的な創業者ともいえる渡嘉敷進(1924~2018)は台湾生まれの「湾生^{わんせい}」であつた。5歳の時、父親の死去にともなつて故郷の石垣島に引き揚げ、尋常小学校卒業後、再び台湾に戻り、台湾総督府の水産講習所養殖科に学んだ。帰省時に川平湾の御木本真珠養殖所を訪れて、クロチョウガイ真珠に強く憧れたという。

1946年(昭和21)年に22歳で石垣島へ帰郷すると、八重山水産業会に事業課長として勤務する。いずれはクロチョウガイ真珠養殖をやってみたいという思いがあつた渡嘉敷は、会長の玉城仁栄に真珠養殖の可能性を熱心に語り、その熱意は、玉城を通じて、琉球水産組合連合会の初代会長に就任していた稲嶺一郎(琉球石油の創立者で、後に参議院議員。元沖縄県知事・稲嶺恵一の父)へと伝わった。

稲嶺は真珠養殖の成功は沖縄の水産業振興につながると確信し、すぐにカキ養殖の創始者で水産養殖の世界的な権威である宮城新昌(日本で最初にカキの垂下式養殖を実践した技術者)に相談を持ちかけ、自ら発起人代表となり、真珠養殖会社設立に向けて準備を進める。そして1951(昭和26)年に琉球真珠の前身である球陽真珠海面養殖(株)が設立され、アメリカ民政府の外資導入許可の第1号となる沖縄と本土の合弁事業としてクロチョウガイ真珠の生産に取り組むことになった。この時の出資比率は、本土の角谷栄蔵(宝石商)が40%、沖縄から稲嶺一郎などが60%であつた。そして渡嘉敷はこの会社の養殖場長兼技術者となった。発足当時の従業員は13名であつた。

同社は2年後の1953(昭和28)年に119個のクロチョウガイ真珠を浜揚げしたが、品質が悪く商業ベースでの目途がたたずに赤字が続いた。このため合弁先の本土資本は1958(昭和33)年に撤退する。再度、資本を募って再建を図ることになった。しかし1961年(昭和36)年9月には超大型の台風が養殖場を直撃し、壊滅的な被害を受けた。翌1962(昭和37)年4月、琉球石油の全面的な支援のもと、社名を琉球真珠株式会社に改め、再発足することになった。

その後、本土資本と技術者が撤退したあとも僅かに残った貝から採れた真珠に品質向上が見られたことから希望を見出し、研究開発を続けられた。そして1968(昭和43)、渡嘉敷

はクロチョウガイ真珠養殖の最難関として立ちふさがる挿核手術において、ある技術的な発見をする。それは体液が多いクロチョウガイへ挿核する際、体液を減少させることで手術を容易にし、挿核不良と脱核を効果的に防止する方法だった。この技術を採用して手術した貝が2年後の1970（昭和45）年5月に浜揚げされると、それは琉球真珠にとって画期的な出来事となった。

それ以前の数年間は、浜揚げ珠数が200個から600個の間で横ばい状態が続いていたが、この1970年の浜揚げでは1600個と飛躍的に向上した。しかも、10mmを超える真円クロチョウ真珠が大量に収穫され、念願の量産化に成功したのである。これによって長年累積してきた赤字は一挙に帳消しとなり、これ以後、クロチョウガイの真珠養殖は採算の取れる事業として軌道に乗った。翌1971年にはクロチョウガイの人工採苗に世界で初めて成功し、母貝の安定供給の一步が踏み出された。翌1976年（昭和51年）3月に渡嘉敷進は第5代社長に就任している。

私たちが最初に川平湾を訪れたのはこの当時のことで、現在の店舗兼飲食施設のある場所で、真珠養殖が行われているのを見たことを覚えている。

八重山地方は天然のクロチョウガイが豊富に生息する海域で、真珠養殖の母貝も当初は天然に生息する貝を使っていた。しかし、養殖を始めた時期からクロチョウガイの天然資源は徐々に減少し始めており、クロチョウガイを量産するためには母貝の大量確保が課題となっていた。少し時代を遡ると、琉球真珠では、当時の専務だった玉城仁栄が宮城新昌に相談、宮城は琉球政府と日本政府に働きかけ、日本政府の資金援助を得て、1966（昭和41）年に川平の現在地に沖縄県水産試験場八重山水産模範養殖場（元水産海洋研究センター石垣支所）が設置されていた。水産試験場では1971年（昭和46）年に付着稚貝21,000個を生産、そのうち14,000個の沖出しに成功、クロチョウガイの種苗生産技術を確立した。この時に採苗した稚貝は、3年後に琉球真珠で挿核手術を受け、さらに2年後の1976年（昭和51）年には、世界で初めて人工採苗貝から真円黒蝶真珠が誕生した。



川平湾にある琉球真珠の直売所（左）、直売所の店内（右）

このように官民一体となった努力の結果、種苗生産から真珠養殖に至る技術体系が確立した。琉球真珠(株)は1974年（昭和49年）に新たに西表島船浮湾にも養殖場を開設、また1987年（昭和62年）には、近くの外離島そとばなりの周辺にも養殖場を開設している。さらに1992年（平成4）年には船浮養殖場に最新の設備を投入した採苗棟を完成させた。

一方、1984（昭和59）年にはフィリピンからシロチョウガイを導入して人工採苗に成功、

1991（平成3）年に日本で初めてシロチョウガイの量産化が実現し、以後、クロチョウガイとシロチョウガイの真珠生産が琉球真珠の2本柱となって、現在に至っている。

琉球真珠㈱の従業員数は生産現場（川平湾と船浮の2ヶ所）と直売店を併せて26人。直売店は石垣島島内に3店舗（川平本店、石垣店、石垣空港店）を抱える。なお川平本店には「アールズ・カフェ」という沖縄そばも食べさせるカフェが併設されており、ここの従業員も含まれる。

旧栽培漁業センター

川平湾の湾奥に抜け、県道79号を海岸沿いに東に向かう。於茂登岳の北側に相当し、海岸近くまで山が迫り、平地は少ない。

いくつかの集落を過ぎ、桴海という場所に国立研究開発法人水産研究教育機構の八重山庁舎があった。元は㈱日本栽培漁業協会の八重山栽培漁業センターがあった場所で、建物はほぼ当時のまま残っている。すぐ近くの別の場所に西海区水産研究所の八重山支所もあったが、現在は八重山庁舎に統合され、西海区水研の建物はなくなっているようだ。

日裁協の八重山栽培漁業センターには、大学の先輩の石橋矩久さんが所長をしていた時に訪ねたことがあった。その当時はクロマグロの種苗生産にチャレンジしていた。しかしどうもクロマグロの生育には水温が高すぎたようで、その後、加計呂麻島の奄美庁舎にそのプロジェクトは移っている。

久しぶりなので様子を探りに敷地内に入ると、どこかで見かけた人がいた。先方も私に気づいたようで、声をかけられた。五島栽培漁業センターにいた中川雅弘さんである。五島栽培漁業センターでは2ヶ年間、クエの漁業について調査を委託されたが、2年目に宮古事業所から移動してきて担当者になられた方である。転勤したことは知らず全く偶然であった。

会議室への入室を勧められたが、あまり時間がなかったので立ち話をする。現在の八重山事業所の主たるテーマはスジアラの種苗生産とのことであった。



湾奥から川平湾を望む（左）、水産研究教育機構の八重山庁舎（右）

底原ダムと前栄里ダム

於茂登岳の麓を取り巻くように底原ダム、真栄里ダム、名蔵ダムという3つの大きなダムが造られている。

八重山庁舎から少し戻り、於茂登トンネルを抜けると、木立の間に海かと錯覚するほど水

を湛えたダム湖があった。底原ダムである。石垣島で最も大きい。

沖縄県で石垣島の次に大きい宮古島は、山らしい山も川もない平坦な隆起サンゴ礁の島なので、雨水は石灰岩の地層に浸み込み地下水を形成し、そのまま海に流出してしまう。このため淡水が慢性的に不足する。そこで小さな溜池をつくって対応していた。しかし近年は土木技術の進歩によって地下水を地層内に貯める地下ダムが可能となり、相ついで地下ダムがつくられ、上水道水や灌漑用水が確保できるようになっている。

しかし石垣島ではこのような対応は不要である。高い山があって山岳地帯から水が流れてくるからこれを貯めるダムを地表につくればよい。底原ダムは山岳地帯と隆起サンゴ礁からなる平地のちょうど境にあたり、山からの水を堰き止めて、下流の農地に灌漑用水として供給している。

ダムの提高は29.5m、堤頂長1,331mであり、総貯水量13,000千 m^3 である。1982（昭和57）年から1989（平成元）年にかけて建設され、総事業費は180億円であった。

以前、台湾の台南で日本の土木技師八田與一が指揮した烏山頭^{うさんとう}ダムを見学したことがある。八田は下流の嘉南平野を大穀倉地帯に変貌させ、台湾で最も尊敬される人物だが、この底原ダムはミニ烏山頭ダムを想起させる。

底原ダムから坂を下り最初の十字路を右折した先に真栄里ダムがある。底原ダムに先立つ1972（昭和47）年から1984（昭和59）年にかけて、45.6億円を投じて建設された。総貯水量は2,300千 m^3 で底原ダムの1/5ほどである。洪水調整と都市用水、灌漑用水の安定供給を目的とする多目的ダムだ。このダムと前栄里ダムを合わせて、農地の灌漑用水として活用されており、受益面積は、水田300ha、畑3,160haの合計3,460haである。1992（平成4）年に灌漑用水路の整備が終わり、供用を開始している。総事業費は灌漑用水路の整備を含めて390億円であった。



底原ダムの放水路（左）、真栄里ダムの堤体（右）

米づくり

ダムの近くの水田ではすでに水が導入され、田植えの準備が始まっていた。

水田には大量の水が不可欠だが、沖縄県の離島はその多くが隆起サンゴ礁の島で雨水は地面に吸い込まれて地下水となってしまう。石垣島は上述したように島の半分が山岳地帯で水が豊富だから、このことが石垣島の米づくりを支えてきた。そして近年では上述したようにいくつもダムが造られ、灌漑設備も整っている。

往時に較べると田の面積は大幅に減少しているとはいえ、沖縄県離島統計によると 2020（令和2）年2月時点における石垣島の田の経営面積は 172.0ha である。沖縄県全体では 378.5ha なので、石垣島は県全体の 45.4%を占め、県下最大に米作地帯といえる。また 2019（令和元）年の米の生産量は約 1,000 トン、推定産出額は 2.7 億円にのぼり、県全体の半分強を占めている。石垣島に次ぐのが伊是名島と西表島であるが、石垣島はこの両島を大きく引き離している。ちなみに 2020 年農林センサス時の米作農家数は 78 経営体であった。

「統計いしがき」によると、2019（令和元）年度の農産物の生産額はサトウキビが一番で 15.2 億円、これに野菜類の 4.6 億円が続き、米は 2.7 億円で野菜類に次ぐ第3位であった。米の次がパイナップルとマンゴーが 2.5 億円と並ぶ。さらにはタバコの 2.3 億円となる。ちなみに野菜類はカボチャとオクラ、ニガウリが中心である。なお農業全体では上述したように和牛生産が 56.1 億円で圧倒的に多い。

石垣島では本州と異なり、2期作が可能である。2020（令和2）年の作付面積は1期作が 266ha、2期作が 92ha で、併せて 358ha であった。この年の沖縄県全体の作付面積は 650ha であったから、石垣島は県下全体の 55%を占める。また収穫量は1期、2期合わせて 1,130 トンで、県全体の 54%を占める。

温暖な気候を活かし、1期作は2月初めに田植えが始まり、6月に収穫できるため「超早場米」として流通している。主要品種は「ひとめぼれ」である。ただ、作付面積は減る傾向にあるが、生産量はあまり変化がない。つまり単位面積当たりの米の生産量は増えているわけだ。1期作は8月に田植えをして12月に収穫できる。ただ最近は二期作を営む農家は減少しているという。

今でも記憶に新しいが、1993（平成5）年は記録的な冷夏と日照不足でわが国の米は大凶作に陥り、大量のタイ米が輸入され、タイ米を美味しく食べる方法などが流布されたことがある。私自身も何度かタイ米を食べたが、この時に日本で最も早く田植えが始まる石垣島のことが盛んに報道された。たしか1期作で収穫された米が種籾不足に陥った内地に種籾として供給され、農家は助けられたのである。



すでに水が張られた水田

高校時代の同級生の干川君は 40 年ほど前に石垣島に I ターンして水牛を使って田を耕し、米づくりをしていた。さすがに今は水牛を使わなくなったが、田が深い石垣島では機械化が難しく、昔は水牛が重要な役割を果たしていたという。その後、黒米などをつくっていた。年をとった現在は、基本的にリタイアして、現在は市民団体などの米づくりのお手伝いをし

ているとのことだ。

崎原公園

東京水産大学に三好寿先生という津波の大家がいた。1960（昭和 35）年のチリ沖津波を予測し、警鐘を鳴らした唯一の学者である。当時、地球の反対側で発生した地震による津波が日本沿岸まで来るとは思われていなかった。

三好先生は大学の学生新聞の顧問をしていた。当時、宮古・八重山地方を襲った明和の大津波を調査されており、石垣島に打ち上げられた巨大なサンゴの巨石の写真を学生新聞に掲載された。私はこの記事の編集に携わっていたので、明和の大津波の威力を鮮明に覚えていた。今回の島旅で、是非この津波石を見ておきたいと思い、津波石があるとされる崎原公園を訪れた。

崎原公園は海岸から 100mほどのところにある。津波で打ち上げられた石は、長径が 12.8 m、短径が 10.4m、高さ 5.9mの巨石で、重量は約 1,000 トンに及ぶらしい。この石は郷土史家の故牧野清氏によって「津波石」と命名されたものであるが、この石の他に大浜、桃里、平久保、伊原間の 4ヶ所にも津波石があり、これらの 5つは「石垣島東海岸の津波石群」として 2013（平成 25）年に国の天然記念物に指定されている。

石の脇に置かれていた案内板によると、その後のサンゴの年代測定の結果、約 2,000 年前の先島津波によって打ち上げられたものと判明したという。残りの 4つの巨石は 1771（明和 8）年の明和大津波で打ち上げられたことが確認されている。それにしてもこれほどの巨石がサンゴ礁から分離し、何百mも移動してきたわけだから、津波の威力の凄まじさが実感できる。

三好先生の写真はこの巨石かどうかはわからないが、先生が写真撮影をされたのは 1960 年代後半のことなので、もうそれから半世紀以上が経つ。当時はサンゴの年代測定は行われていなかったものと考えられるから、旧空港からのアクセスが一番いいこの巨石を撮影したのではないかと想像される。



オヤケアカハチの像（左）と崎原公園の大津波石（右）

公園の近くにオヤケアカハチ之像が立ち、八重山の土着神を伝える御嶽も近くにあった。オヤケアカハチは石垣島の大浜を根拠地とする 15 世紀末の豪族の首領である。公園のある一帯が大浜であるから、この一帯を根城としていた。石垣島には 3 人の実力者がおり、オヤケアカハチが乱世を鎮め、石垣島を統一したことは先に示した通りである。

この先島諸島（宮古・八重山諸島）は琉球王朝の支配が及ばない土地であった。尚王朝は宮古諸島を従わせ、ついで八重山諸島を支配下に置こうとしたが、首領のオヤケアカハチは琉球王朝への朝貢を拒否して従わなかったため、宮古島の仲宗根豊里親らの琉球王府軍が1500年に八重山に攻め込み、これを討った。そして八重山を王朝の支配下に置いた。王朝からの独立を志向したオヤケアカハチは八重山の英雄だったが、敗北により琉球王国の支配下に入った。彼の像の解説書には、「正義感が強く、島の自由のために先頭に立って権力に立ち向い、八重山の人々から太陽と崇められ信望を一身に集めていた」と書かれていた。

八重山そば

私は沖縄そばが大好きである。沖縄に出かけた時には昼食はたいてい沖縄そばで済ませることが多い。夜も場合によってはメに食べる。

沖縄そばといっても内地のラーメンと同様、千差万別で、地方や店によって、麺の種類やスープ、具が異なる。「そば」と呼ぶが、蕎麦粉は一切使われていない。原料は小麦粉である。中華麺と同様、かん水を加えて打つ。

石垣島の沖縄そばは「八重山そば」と呼ばれる。八重山そばには牛の煮込みをトッピングしたものがあり、これは他の地方には見られないものだ。上述したように以前、干川君に案内された伊原間集落にある新垣食堂の「牛そば」はこってりした濃厚なスープでこのほかうまかったのもう一度食べたかったのだが、店はすでに終了していて食べられなかった。代わりにうまい店はないかと、前日、行った居酒屋で聞いた。居酒屋のマスターが教えてくれたのが「平良商店」だった。

崎原公園から石垣港に戻り、平良商店を探した。平良商店は登野城漁港の国道390号を挟んだ北側にあるちっぽけな店だった。以前、登野城漁港には漁協直営の飲食店があり、その後、民間会社が引き取り「どてっぺん」という比較的評判のいい居酒屋になっていたが、現在は休業中である。この店から直線距離にして200mほどの場所にあった。

平良商店では、三枚肉を細切りにした八重山そばと、牛肉を煮込んだ牛そばを食べた。2人で入ったから半分ずつ2種類を食べたことになる。八重山そばに共通する特徴は本島や宮古島の沖縄そばと違って麺が細い点だろう。丸麺と平麺があり、丸麺は通常の沖縄そばに比べると細い。居酒屋で紹介してもらったとおり、濃厚なスープは新垣食堂の牛そばに劣らない、美味しいそばであった。



平良商店の八重山そば（左）と牛そば（右）

八重山漁協

約束の時間まで少し間があったので、漁港区域周辺を視察する。約束していた 14 時に八重山漁協を訪ね、伊良部幸吉専務理事から話を聞いた。川平地区の正組合員である佐々木真君も同席した。

八重山漁協は与那国島を除く石垣島と竹富町の島々の漁業者で組織されている。与那国島には与那国漁協があり、ここだけは独立している。八重山漁協の組合員は正が 241 人、准が 88 人で、合わせて 329 人である。島別の組合員数は、西表島が正 11 人、准 4 人の 15 人、小浜島が正 9 人、准 5 人の 14 人、黒島が准 1 名、鳩間島が准 1 名、波照間島が准 1 名という内訳で、竹富島と新城島あらぐすくじまには組合員はいない。つまり八重山漁協の組合員は石垣島が圧倒的に多い。石垣島の地区別の正組合員数は、登野城地区が 51 人と最も多い。次いで漁協事務所のある新川地区が 47 人、その南側の新栄地区が 42 人であり、石垣島の漁業者は石垣港周辺に集中している。その他の地区は全て合わせて 81 人という内訳である。

重要港湾の石垣港を挟んで石垣漁港（第 2 種）と登野城漁港（第 1 種）があり、組合員の大部分はこの 2 つの漁港を利用している。島内にはこの他に伊野田漁港（第 1 種）と船越漁港（第 1 種）の 2 港があるが、両漁港の利用者は少ない。

漁協の職員は正規が 21 人、臨時雇用がインドネシア人を含めて 6 人、の合計 27 人と大所帯である。組合員が一番多い登野城地区には支所が置かれている。ただし石垣島以外の島には漁協の出先機関はない。

漁協では購買、販売、共済、指導の基本的事業の他に、製氷冷凍冷蔵、加工、利用の各事業を営んでいる。だいぶ以前はクルマエビ養殖の自営事業を営んでいたが、多額の赤字を抱えて以来、事業から撤退している。

利用事業はドックを有し、漁船の修繕などが行われている。加工事業はモズク塩蔵加工と魚類（ヤイトハタ、スギ、アカマチ）などをフィレー等に加工し冷凍品処理がメインである。加工事業は職員 2 人にインドネシアの実習生 5 人と臨時が 1 人で運営している。年間の事業収益は 3 億円を超える。

組合員によって営まれている漁業は、マグロはえ縄、ソデイカ釣り、カツオ釣り、集魚灯マグロ釣り、深海一本釣り、電灯潜りなどである。またモズク、魚類（ヤイトハタ、スギ）、ウミブドウ、アーサ（ヒトエグサ）の各養殖業が営まれている。

八重山漁協のメインはマグロ漁業である。マグロ類は漁獲が多い順にキハダ、メバチ、クロマグロ、ビンナガが漁獲されており、2020（令和 2）年の石垣市の統計によると、総漁獲量 1,043 トンのうち上記 4 種が 536 トンと半分以上を占めている。マグロ類は、①伝統的なマグロ延縄漁業、②近年盛んになっている集魚灯によるマグロ釣り、そして③パヤオ周辺での曳縄釣り、の 3 つの漁業で漁獲されている。

マグロ延縄漁業は 20 経営体が営む。基本的に 1 隻に数人が乗り組んで操業するが、1 経営体だけは単身で操業しているようで、何かトラブルが発生した場合は危険が伴う。集魚灯を使ってマグロを集めて釣る漁業は久米島から伝わった新しい漁業で、まだ 10 年も経っていない。現在 30 経営体が営む。水深 100m ほどに分布するキハダマグロが対象で、集魚灯を水中に沈めてマグロを集め、電動リールで釣る。この漁法では 80～100 kg の大物が釣れ、パヤオで釣るよりもはるかに大きいから近年人気を高めている漁法である。曳釣りを営む

経営体は基本的にパヤオで操業している。パヤオは島の周辺に配置され、漁協が自前で設置したものが5～6基あり、これとは別に沖縄県が設置したものもある。パヤオは表層と中層の2タイプあり、主としてキハダとカツオを対象としている。パヤオで操業する組合員は浮魚礁研究会を組織しており、現在の構成員は72人である。

メインのマグロ類はほとんどが島外に出荷される。漁獲時点で生きていたものは「生あがり」といい、神経を抜いて出荷、死んで水揚げされたマグロは「死あがり」と呼び区別している。そして水揚げ時の状態がわかるようにそれぞれにタグをつけている。マグロの出荷先は熊本県が多い。

マグロ延縄と集魚灯マグロ釣りの漁業者はソデイカの漁期を迎えると、マグロからソデイカ釣りに転換する。ソデイカ釣りの漁期は12～5月までの半年間であるが、現在、ソデイカの単価が1,000円/kg（頭部を除いたヒレ付）と比較的高く、しかも1日100本ほどを釣る人もいることから、ソデイカ漁に切り替えている人が多いという。ソデイカは旗流し漁法で、漁場の水深は500～600mである。

一本釣りは水深300～500m付近の深海釣りである。漁場は島の周りで近い。主な漁獲物はマチ類、ハマダイ、アオダイなどだ。組合員の部会組織である一本釣り研究会のメンバーは104人であるが、メンバー全員が常に営んでいるわけではなく実際に操業している人はこれよりも少ない。研究会のメンバーは水産庁の離島漁業再生支援交付金を活用して、食害が深刻になっているサメ駆除を行っている。

電灯潜りはサンゴ礁周辺で、夜間ライトをつけて魚介類を採取する漁法だ。フーカとスキューバの両方があり、フーカの場合は1人ないし2人で操業する。フーカのホースは100mほどなので移動範囲は限られる。電灯潜りの漁師は電灯潜り研究会に所属しており、現在のメンバーは70人である。

カツオ釣りの漁船が1隻だけ夏季に操業している。しかし釣りの餌であるグルクンの稚魚が最近獲れないことから、操業できない状況が続いているという。また黒潮の蛇行により島周辺に回遊して来るカツオが少なくなっているようだ。

尖閣列島は石垣市に所属している。マグロ類やソデイカの漁場は石垣島から離れた場所にも形成される。ただ尖閣までは190kmほど離れており、漁船で7～8時間を要することから、燃油代や所要時間を考慮し、出漁する漁師はいないという。

モズク養殖は13経営体が営む。サンゴ礁の間の砂地が漁場だ。令和3年度のモズクの生産量は1,658トン、生産額は1.9億円であった。一昨年（令和2年度）は2,800トンと豊作であったが、今年度は500～600トンに減少、年による変動が大きい。養殖用の網は、幅2m、長さが18mないし20mのノリ網が使われ、通常、このノリ網が全部で2,000～3,000枚が張り込まれる。養殖用モズクの種苗は天然採苗と人工採苗の両方が使われている。

収穫したモズクは組合員から買い取り、漁協で一括して塩蔵処理している。買取価格はサンプルの状態を見て判断する。モズクの成熟度や付着するゴミ類の多少などが判断基準になる。買取価格は100～150円/kgである。塩蔵加工したモズクは、勝水産、カネリョウ、ホクガン（糸満）、八重山漁協の4業者が買い取る。八重山漁協では塩蔵モズクをさらに2次加工して販売している。

アーサ養殖は11経営体が試験養殖している段階で、来年度区画漁業権の免許を取得する

ことになっている。この他に海ブドウの陸上養殖と魚類養殖が登野城漁港で行われているが、この内容は後述する。

なお、上述したように漁協の自営事業でクルマエビ養殖を営んでいたが、疾病の発生で大きな赤字が発生、撤退した。この事業の失敗で多額の累積債務を抱えた時期もあったが、現在では全て解消している。その養殖場は元の組合長が(有)石垣エビ養殖として営んでいる。またエポック(株)の石垣島車エビ養殖場もあるので石垣島では2業者がクルマエビを養殖している。なお、竹富島にはユウグレナ(株)（微細藻類から油を抽出するベンチャー企業）のクルマエビ養殖場もある。

令和3年度の漁協の販売実績は約7.8億円であった。このうち養殖モズクが1.9億円を占める。地元への販売は0.5億円、糸満を中心とした沖縄本島への出荷が約1.3億円、県外の消費地市場への出荷が約2.3億円、マグロを中心とした相対が約1.8億円である。



八重山漁協の事務所（左）、マグロ延縄漁船（右）

石垣市役所

漁協で取材してから石垣市役所に向かった。もとの市役所は石垣港の近くにあった。新空港ができたことにより、広い旧空港跡地が残ったことから、用地の活用を図るために新庁舎の建設が進められてきたわけだ。2019（令和元）年7月に着工し、2年強を費やして2021（令和3）年11月に完成した。つい2ヶ月前にオープンしたばかりのほやほやの庁舎である。

敷地面積は約3haと広大で、来庁者向けの駐車場は231台分あり、相当広い。地下1階、地上3階建ての鉄筋コンクリート造りで、1、2階は執務室、3階は市議会の議場となっている。庁舎内には売店や食堂も整備されている。宮古島も石垣島の少し前に新市庁舎が建てられているが、こちらには食堂はなかった。

この庁舎は東京オリンピックのメインスタジアムになった国立競技場を設計した隈研吾建築都市設計事務所の設計によるもので、赤瓦の屋根と木の活用を得意とする限らしい建物で、館内は広々として開放的である。

最初に2階のDX室に行き統計書入手、市史編集室で開拓集落に関する資料を借りて1階でコピーした。引き続き、畜産課で肉用牛について取材する。

市役所の隣には地上5階建ての県立八重山病院が建つ。市役所庁舎に先立つ2018（平成30）年に移転したものである。旧空港の滑走路はまだかなり広い面積が未利用のままになっ

ているので、今後、様々な公共施設などが建てられることになるのだろう。



新石垣市役所の外観（左）、木が多用されている市役所の内部（右）

登野城の養殖場

石垣市役所から養殖場がある登野城漁港に向かった。

石垣島は周囲をサンゴ礁で囲まれているため、水深の確保が必要な魚類養殖の適地はない。そこで登野城漁港の東側に、魚類養殖専用の水域を確保し（公共事業で沖縄県が整備）、ここでヤイトハタとスギの養殖が営まれている。養殖方式は小割生簀で、一辺が6×6mほどの小さなものだ。

ヤイトハタは沖縄県が種苗を生産し、普及に力を入れてきた魚種である。旧沖縄県水産試験場八重山支場で1996（平成8）年に種苗の量産化に成功、その後沖縄県栽培漁業センター（本島の本部町）に技術が移転され、安定的に種苗が供給できるようになった。登野城の養殖場では県下の先駆けとして1998（平成10）年から養殖に取り組んできた。一方、スギも同センターが2001（平成13）年から種苗生産に取り組み、県内各地に配布している。

登野城で魚類養殖に取り組む経営体は10で、このうち1経営体が専業、残りは兼業である。

ヤイトハタの養殖は伊平屋島でも行われていたが、こちらは陸上養殖の閉鎖循環式であった。この方式は電気代がかかることや疾病のリスクが高いことから私は事業の採算性を疑問視している。登野城の海面養殖は比較的長いこと継続しているから、恐らく採算がとれているのだろう。

スギの養殖は伊江島でも30年ほど前に行われたことがあり、「新魚種養殖」の調査で取材したことがあった。当時は「クロカンパチ」の名称で外食向けに売られていたが、その後、やめたようだ。なお、伊江島にも登野城と同じようにサンゴ礁を掘削して外側に防波堤を作った魚類養殖用の水域が造成されているが、現在ではあまり使われていない。

この海面養殖場の陸側に海ブドウ（緑藻のクビレズタ）の陸上養殖施設が置かれている。2経営体が簡易的な水槽をつくり、海水をポンプアップし、海ブドウを養殖している。水槽の周囲をビニールで囲っているが、台風が来たら吹き飛ばされそうだ。石垣島の飲食店には海ブドウを扱う店が多いので、ここから供給されているのかもしれない。

道路を挟んだ反対側には環境省の「国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター」が置かれている。石垣島と西表島にかけて広がる日本最大のサンゴ礁である石西礁湖の研究、モニタ

リングをする施設だ。

漁協での話では、去年は台風が来るのが遅く、水がかき混ぜられなかったので、水温が上昇、サンゴの白化が目立つという。また、石垣島では「水産多面的機能発揮対策事業」でオニヒトデ駆除に取り組んでいる。

環境省の隣には㈱ホクカン（製缶会社）の石垣工場があった。

レンタカーの借用期間はこの日の18時すぎまでであった。したがって営業時間内に返さなければならない。登野城漁港から空港の営業所まで車を走らせた。帰りは路線バスで石垣港前のバスセンターまで戻る。空港から港までは30分間隔でバスが運航されており、所要時間は30分強であった。



登野城漁港内の魚類養殖施設（左）、同漁港用地内に置かれている海ブドウの陸上養殖施設（右）

令和5年1月15日

八重山博物館

西表島から戻り、市立八重山博物館をみに行った。

博物館のある場所は八重山島蔵元跡だったところの隣になる。蔵元とは琉球王朝が八重山を統治するために置いた役所である。最初の蔵元は王府から任命された西塘が出身地の竹富島に1524（大永4）年に開庁したのが始まりであった。しかし竹富島は交通が不便で、土地が狭かったことから石垣島の大川村に移り、さらに1633（寛永10）年に八重山キリシタン事件で処刑された本宮良頭石垣永将の屋敷跡であるこの地に移転した。しかし1771（明和8）年の「明和の大津波」で被災した後は大川村の高台に、さらに大川村のフナナに移り、1815（文化12）年に再びこの地に戻った。廃藩置県後の1897（明治30）年に蔵元は廃止になり、350年余続いた蔵元制度は消滅した。

蔵元跡には道路元標識がたつ。この元標は道路の起終点を定めた標石で、1920（大正9）年に施行された旧道路法で設置が義務づけられていたらしい。この道路元標は八重山群島政府が創立1周年を記念して復元したものだという。つまり、旧役所が立地し、道路元標識があったことから、この博物館のある場所はまさに八重山の中心地に建てられたのだった。

市立八重山博物館は1972（昭和47）年10月に開館した。つまり沖縄の日本復帰とほぼ同時ということになる。この博物館は旧市庁舎の跡地に建てられた。木造平屋建てですでに50年を経過しているため、敷地は狭くなり、老朽化が進む。このため新博物館の建設が構想されているようだ。

博物館の玄関口には明和の大津波に関する被害状況等がまとめられていた。八重山地方にとってこの津波が歴史的な大事件であったことを物語るものだ。館内の中央部には丸木船とサバニがそれぞれ数隻ずつ置かれていた。また旧役人の公邸であった旧宮良殿内の模型と使用されている木材の種類、生活や産業関係の民具、葬具、織物、獅子舞、漆器や焼き物など八重山の歴史と民俗、文化を知ることができる展示物が狭い部屋いっぱい詰まっていた。

那覇市にある沖縄県立博物館は充実した内容なので、旧空港跡に新設が計画されている八重山博物館も同じように充実した展示になることに期待したい。



蔵元跡と道路元標（左）、市立八重山博物館の玄関（右）

引き続き、港の近くの市立図書館で郷土資料を閲覧し、必要箇所をコピーする。その後、竹富島に移動した。

一魚一会

竹富島から戻り、ホテルミヤヒラにチェックイン。この日の夜は川平に住む佐々木真夫妻と会食をすることになっていた。奥さんの運転で、夫妻がホテルにやってきた。近くの「一魚一会」という店に行く。

佐々木君は私が以前勤めていた海洋調査会社の同僚で、奥さんも社内結婚だったからよく存じ上げている。彼は東京の葛飾柴又の出身で、寅さんの映画のロケ地だから知らない人はいない。このことで結構得をしている。

学生時代に石垣島を訪れ、憧れに地になったからいつか移住しようと思っていたのが実現した。もう 30 年ほど前から川平湾で漁師をしながら、ダイビングのガイドや遊漁案内、サンゴ礁などの海洋調査をはじめ様々な仕事をしながら生計を立ててきた。器用な人物である。今回も漁協とのコンタクトや現地情報などいろいろお世話いただいた。

本業は川平湾で小型定置網と採貝・採藻漁業を営んでいる。ちなみに川平で漁業を営むのは佐々木君のみである。彼によると近年、魚介類が少なくなっており、特にタコやナマコの減少は顕著だという。沖縄県では砂浜にやって来たアイゴの稚魚の「スク」を毎年採取し、塩漬けにする。神からの贈り物として珍重している。スクガラスと呼ばれ、冷奴に乗せて食べるのが沖縄名物となっているが、去年はバケツ 1 杯分しか獲れなかったそうだ。

石垣港周辺の居酒屋は内地からの観光客相手が圧倒的に多いから、この店でも三線を弾く島唄のライブ演奏が行われていた。

ビールと泡盛を頼む。ビールはもちろんオリオンビール。泡盛は佐々木君のお薦めをいただいた。ただ銘柄は忘れた。泡盛はタイや中国雲南省方面をルーツとする酒である。泡盛という名はアルコール分を調整するために振って泡のたち具合から判断したことにあるようだ。アルコール分の高いものも低いものも泡があまりたたず、ちょうどいいものがよく泡立つ。度数の異なる泡盛を混ぜてよく振り、泡の状態を見てブレンド割合を決めたのである。

ジーマミー豆腐、ラフティー、ミミガー、ゴーヤチャンプル、マグロの刺身、石垣牛の握りなど八重山の郷土料理を食べる。ちなみにこの店のジーマミー豆腐が一番うまかった。ジーマミー豆腐とは地豆、すなわち落花生を原料とする豆腐である。八重山の開墾地ではよく落花生が作られていた。落花生は根粒菌の働きで窒素肥料がいらないので、島の栽培対象種としては適していたのだろう。



一魚一会にて佐々木夫妻（左）、島唄のライブ演奏（右）

令和5年1月16日

ホテルミヤヒラ

ホテルミヤヒラは石垣島で最も古いホテルである。戦後まもない1953（昭和38）年に創業している。私たちが新婚旅行で泊まった当時は宮平観光ホテルといった。離島航路のターミナル前にあり、西館、東館に続いて2018（平成30）年に美崎館が新しくできた。今回は美崎館に泊まった。

この日は月曜日で博物館も図書館も休館日になっていたため、前日に用事を済ませていた。朝から上述した佐々木真君と高校の同級生の干川明君がホテルにやってくる、2時間ほど旧交を温めることができた。佐々木君はトレードマークのねじり鉢巻きに長靴といういでたちで現れた。市内で評判の豆腐屋で「島豆腐」と「ゆし豆腐」を買ってきてくれた。

干川君は前日開催された「石垣マラソン」で視覚障がい者の伴走を務めていて、地方紙の朝刊にも紹介されていた。75歳で10kmを伴走するなど私にはとてもできないが、大した体力の持ち主である。

2人はIターン者であることは共通しているが、お互いが会うのは初めてだったらしい。一方は漁業、一方は農業に従事している。干川君はNPO法人石西礁湖サンゴ礁基金の理事を務めていて、サトウキビの株出し栽培などの赤土流出防止への取り組みとその成果が高く評価されて、日本サンゴ礁学会から「サンゴ礁保全活動奨励賞」を受賞しており、漁業と農業の接点を担ってきた。

佐々木君の自動車に干川君も同乗して、石垣空港まで送ってもらった。途中、本屋に寄り、竹富町の町誌シリーズの一部を購入する。

12時すぎの石垣空港発羽田空港行のANA便で、帰路についた。空港の売店に地元の八重山農林高校が栽培した食材を使った「新ばち農弁当」が売られていたので、これを買い込み、飛行機の中で食べる。郷土色豊かな弁当であった。



ホテルミヤヒラで干川君、佐々木君（左）、ホテルから離島ターミナルを望む（右）

【文献】

石垣市総務部市史編集室編（1998）：石垣島村むら探訪－野底・伊原間・開拓の村むら・桴海・安良一，石垣市．380p.

大浜英祐（2000）：世界初クロチョウ真珠誕生物語．私家本．260p.